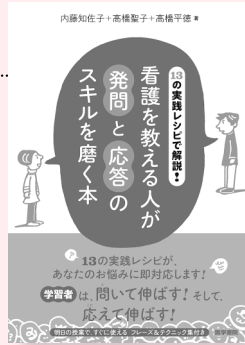


13の実践レシピで解説!

看護を教える人が発問と 応答のスキルを磨く本

内藤知佐子・高橋聖子・高橋平徳=著
定価2,640円(本体2,400円+税)
医学書院 ☎03-3817-5600



問いかけける力を授けてくれる1冊

佛教大学保健医療技術学部 在宅看護学・准教授 清水奈穂美

誰もが経験する「対話の壁」

「発問」と「応答」のスキルを磨く——このタイトルを見た瞬間に、看護を教える立場にある多くの指導者や教員が経験していると思われる新入職員・学生との対話の壁を、そつと壊してくれるエッセンスがつまっていると感じ、すぐさま手にとりました。

学生に「訪問に行つてどうだった?」と投げかけると、表情が(何を答えたらいいのだろうと)一瞬間まるくがります。そして、学生は「療養者の疾患は○○で、家族構成は○○で」と情報を説明し、状況ばかりを話してしまうことが少なくありません。それに対し、「そうじゃなくて、どう思ったの」と尋ねると、圧力になり、学生が黙ってしまふ。これで対話が進まず、学生に何を考えてもらいたかったのか伝わらないのです。

問いかけ、どう応えるかに踏み込む本

本書の前半は、学習者の学びを促進する意図的な発問の必要性を説き、導入・発散・収

束・深化・まとめ・運営からなる6つの「発問」、待つ・聴く・確かめる・返すからなる4つの「応答」と心理的安全性を解説しています。「問いかけ」で、それに対する学生からの反応に「どう応えるか」について、ここまで踏み込んだ本はなかったように思います。

後半は、発問と応答のスキルを磨くための13の実践レシピが示され、指導や教育に活用してみたいと思うフレーズやテクニックの数々が満載です。

この本を読み進めていくと、単に「正しさ」や「答え」を与えるのではなく、考え方(思考プロセスや判断に至るまでの道筋)や看護師として考える力を身につけてもらうことが大切なのだといふことが分かります。そして、学びの主役である学生たちが考えたことや、彼らが気付いたことに対して、私たちはまず受け止め、ちゃんと反応を返し、認めながら、さらなる問いかけを行い、看護の意味を考えていく、この対話の循環により発問が成り立つというプロセスが理解できます。

指導者自身も「問いかけられる」ことが大事

この本の面白いところは、問いかけがうま

くいかない場合に陥りやすいポイントも示されているところで、かなり実践的です。また、その理解を促すべく、本書を手にした読者に対し「問いかけている」ところです。問いかけられることは、指導者にも必要なことですね。教える側としての自身の思考と実践を振り返り、きつとこれまでの関わり方を見直すきっかけとなるでしょう。

読み終えたときには、学生も、指導者も教員も、共に学び合う存在であることに気付く、考えることの面白さを実感できると思います。

カンファレンスにも応用可能!

この発問と応答のスキルは、学生指導を中心に書かれていますが、学生だけでなく、思考力や判断力を鍛える現場の看護職の教育・指導にも活用できるものです。多職種チームとのカンファレンスや、話が行き詰まったときにも応用できると思います。対話を通して問いかけ合う仲間ができれば、応え合い、成長するチームづくりができたなら、思考の幅を広げ、モチベーションを高めてくれるでしょう。何より、生涯にわたり学び続ける看護のプロフェッショナルとして、一人ひとりが考えることのできる看護師として育つことにつながることでしょう。

ぜひ、手に取っていただき、実践に役立ててみてください。